

氏名	太田礼穂
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博甲第 7801 号
学位授与年月	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	絵本共同読み活動における自己への誤帰属と相互作用

主査	筑波大学教授	博士（教育学）	茂呂雄二
副査	筑波大学教授	教育学博士	原田悦子
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	綾部早穂
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	大六一志

論文の内容の要旨

（目的） 子どもと大人が共同で問題解決したあと、大人が行った行為を「自分が行った」と誤帰属する現象の存在が注目されており、この現象の生起が大人との共同問題解決を通じて生じる学習と関係があると指摘されている。しかし、どのようなやりとりが誤帰属の生起に関連しているか明らかになっていない。そこで本研究は、自己への誤帰属とやりとりの内容及びその特性との関係を明らかにするため、発話と発話連鎖の詳細に関するやりとりの微視的分析を行なうことで、学習のメカニズムにアプローチすることを目的にした。

（対象と方法） 行為の誤帰属研究に共通するパラダイムは、特定の協働問題解決（地図問題やパズル課題等）を用意し、プレテスト、協働問題解決セッション、妨害課題、ポストテストによって行われる。プレテストとポストテストの成績の伸張が示す能力のポテンシャルティと、誤帰属の傾向性の相関をみる。従来研究では、誤帰属の傾向性（自分がやったとする誤りと、他人がやったとする誤りの質的違い）と成績伸張を検討したが、本研究では協働問題解決セッションの質的プロセスの違いに照準した。また、従来研究では、ドールハウスなどの文化的なバイアスが結果を左右する恐れのある課題が用いられることが多いため、本研究では絵本の協働読みを取り扱い、大人と子どもの創造的な活動を対象としている。

（結果） 本論文は 5 部構成、全 10 章で構成されている。第 I 部では先行研究の知見を整理し、研究課題ならびに目的を示した（第 1 章～第 2 章）。第 II 部～第 IV 部は実証的研究を実施し、これをもとに第 V 部で総合考察（第 10 章）を行なった。

第 3 章では、家具配置課題の追試を通して、従来の研究の問題点を指摘した。発話内容の分析から、大人の働きかけ全てに同意しているのではなく、自分なりの観点をいながら、家具配置の共同活動に参加していたといえ、子どもと大人のやりとりを微視的分析の必要性および共同活動場面の設定のための観点を得て、

絵本共同読み活動などの想像活動の必要性を指摘した。

第 4 章・第 5 章では、絵本共同読み活動に着目するにあたり、保育者ならびに保護者に読み聞かせ場面における子どもの様子や読みの“理解”について尋ね、大人がどのような観点から子どもの読みの理解を支援しようとしているかを分析し、大人は、子どもの行為や発話に読みの“理解”を見出し、積極的な意味づけをすることで、やりとりを仕掛け、その中で子どもの読みの“理解”を探り出そうとしていることが明らかになった。

第 6 章では、子どもと大人の発話分析から発話の特徴と自己への誤帰属との関係について検討し、子どもが独自の解釈を展開する発話「ファンタジーの展開」と「沈黙回数」が多いやりとりでは自己への誤帰属が生じにくいことを明らかにし、また発話連鎖の分析から、働きかけに対する子どもの応答について検討し、大人の働きかけが登場人物の気持ちに関するもので、それに対して子どもが具体的に応答していたとき、自己への誤帰属が多くなることが明らかになった。以上から、発達の最近接領域の議論を参考に、自己への誤帰属が、発展途上にある学習の萌芽的過程を反映するという仮説を提案した。

この仮説を検証するため、第 7 章では理解すべきトピックの難易度から子どもと大人のやりとりの質的な違いを分析し、小学 3 年生と年長児では、出題された問いへの容易さだけでなく、大人とさらに話し合うときのインタラクティブなやりとりに質的な違いがみられることを明らかにした。

第 8 章では、年長児にとって理解すべきトピックが易しい共同活動を設定し、自己への誤帰属と学習の関係について検討した。その結果、登場人物の気持ちや外的特徴など、具体的な働きかけがあった共同活動に参加した子どもは、そうでない共同活動に参加した子どもよりも、共同後に答えの改善がみられ、大人との共同が子どものテキスト理解に寄与することを明らかにした。

第 9 章では、第 7 章の小学生に関する知見ならびに第 8 章の知見をさらに検証するために、易しい活動内容のときに大人との協力を価値づけ、共同の目的を明確化したときの自己への誤帰属と学習の関係を検討し、問いの内容と大人の働きかけに意味が見出され、共同の目的が明示されていても、それが子どもにとって発展途上にあるような読みではなく、能動的な応答によって成立しないやりとりのときには、子どもは大人が提案した読み方を「自分のもの」としないことが示唆された。

(考察) 自己への誤帰属は大人との共同の中で可能になる、発展途上にある萌芽的学習を反映することを示した。この萌芽的学習は、大人の働きかけだけで機械的に成立するものではなく、インタラクティブな過程のなかで成立していくといえる。これは、保育者や保護者が子どもの読みの“理解”を仮定し、相互作用のなかで子どもの“理解”を捉えようとする点とも符合する。

審査の結果の要旨

(批評) 子ども単独では正解に達することは出来ないが、大人の支援のもとで可能になる潜在的なコンピテンシーの存在を、大人との共同活動の質的な分析から示したことは独創的であり、高く評価できる。従来研究では扱われてこなかった絵本の読み聞かせ活動を実験的研究に適合させたことも評価できる。

実際に子どもたちを対象に形成実験等をおこなうことで成果をさらに確実なものにすることなど課題も多いが、幼児および児童とくに成績が中程度から下のレベルの子どもたちに対して、絵本読み・読解活動において、どのような働きかけが有効かに関して一定の成果を示したと評価できる。

平成 28 年 2 月 4 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。